

水木氏とマレー半島旅行も

上高井郡小布施町の千曲川ハイウェイミュージアムで今月3日まで、「水木しげるの妖怪博物館」が行われた。老若男女問わず、誰からも親しまれ続けるキャラクター「ゲゲゲの鬼太郎」の作者、水木氏の妖怪ワールドを紹介し、訪れる観光客や地元の人たちの

目を楽しませていた。その一角に展示されていたのが、新生病院歯科口腔外科・北村豊医師のコレクション、「Jah-net族の木彫り像」「Mah-meri族のお面」「精霊Saoh」。マレー半島の主としてジャングル地帯に住む先住民、Mah-meri族やJah-net族にまつわるものだという。

1977年から3年間、青年海外協力隊員として、マレーシア先住民のオランアスリのために造られた国立病院に派遣

水木しげる妖怪博物館へ 収集した「精霊」を展示

新生病院・北村豊氏



生の族のいるところを信じていると、魚業者Saoh(サオ)精霊

された北村氏。「巡回診療を通じて、ジャングルに住む人々と多くの時間を共有した」と振り返る。好奇心が旺盛な北村氏は、ジャングルのなかで先住民とともに寝食を共にしながら、先住民の生活の知恵や文化の奥深さに惹かれていった。

「木彫りだけでなく、罨や吹き矢などの道具、楽器などの全てに手作りならではの工夫がされていて、とても愛着がわく」

と目を細める。

94年、作家の大泉実成氏を通じて水木氏から通訳と案内を頼まれ、一緒にマレーシアのジャングルへ精霊や妖怪などの取材旅行へ出かけた。

「先住民には、ジャングルや夢の中に現れる精霊を木彫りにする貴重な文化が未だに残っている」と北村氏。水木氏と一緒にそれらの村を訪ねて精霊の話聞いた。

「水木しげるの妖怪探検」

(大泉実成著・講談社文庫)には、その時の様子が詳細に描かれている。

北村氏は、マレーシアのジャングルについて「物は少ないが、豊かな森の自然に抱かれて、精霊たちと心穏やかに暮らせる。私にとっては桃源郷のようにも感じられ、人が人らしく生きていくことのできる数少ない場所だと思う」と語った。



Mah-meri族のお面など